

2023年度浩志会本会員 活動方針

～どんどんシェアしよう、皆さんの知見、経験を～

本会員代表幹事 園田 庸(外務省)

1 はじめに

2020年以降、浩志会活動にとっての最大の障害であったコロナ禍が、2023年5月の5類移行により、ようやく落ち着きました。本方針執筆時点(2023年8月中旬)でまだ完全に安心できる状況になったという訳ではありませんが、人々の活動はコロナ禍前の状態に戻りつつあります。

浩志会の活動も復活してきました。研究会員においては1泊2日の最終合宿研修会(6月)、本会員においては懇親会も含めたグループ活動合同月例会(5月)、OB・OG会員においては対面での総会(7月)が、いずれも4年ぶりに開催されました。浩志会はやっぱりこうでなきゃ!と思われた会員の皆さんも多いのではないかと思います。

勿論、コロナ禍の最中、浩志会事務局の御尽力で関連インフラを整備していただき、また、会員各位の工夫のおかげもあって、Zoomなどオンラインというコミュニケーション手段が一般化し、地方、海外在住の方々でも参加可能な活動が増えました。

これからは、コロナ禍の3年を取り返す以上に、新しい手段も活用して、浩志会活動を以前よりも増して活発にすることができる絶好の機会と言えるかと思います。

2 活動方針

そうした認識を踏まえて、浩志会活動を更に盛り上げるべく、2023年度本会員活動方針として「どんどんシェアしよう、皆さんの知見、経験を」を掲げたいと思います。

これは、何より、私自身の研究会員及び本会員の計6年間の浩志会活動を踏まえたものです。これほどまでに素晴らしい知見、経験を持った人々の集まりはそう無く、それも多種多様です。直近では、本会員グループ活動において、毎月の月幹事の方々のアレンジしていただく活動は、いずれも面白く、新鮮な驚きと新たな発見が必ずあり、いつもと違う空間、時間を味わうことができました。

もちろん、私も月幹事としてアレンジした活動があり、これは私自身にとっては日常の業務の延長線にあるものでしたが、他の参加された方々からはとても得がたい経験ができたとの感想をいただきました。そんな皆さんがお持ちの知見、経験を少しでも「シェア」していただくだけで、他の多くの人々の知見と経験を豊かにすることができる機会こそ、この浩志会という場だと思えます。

「シェア」という言葉について、少し話を敷衍します。

SNSの発展、普遍化により、「シェア」あるいは「共有」という言葉が以前にも増して多く見られるようになりました。iPhoneだと「↑」のような、アンドロイドだと「<」のようなシェアボタンをタップすれば、知ってもらいたい情報を瞬時に、多くのユーザーにシェアできます。更に、シェアした情報に対して閲覧者が「いいね!」などの評価を即時に返すこともでき、シェアしたことへの反応がすぐに得られます。

インターネットという空間ができる以前、情報のシェアを主に担っていた主体は、テレビ・ラジオ、新聞・雑誌といった媒体でした。すなわち、情報の収集・編集・発信のプロが一般の人々に対し、プロとして厳選した情報をシェアするというのが一般的でした。今もそうした媒体は同様の役割を有しているものの、個人がSNSで発信している情報をそのまま報じるケースも増えてきています。もはや、情報の発信源の主体は、本来情報のプロではない個々の人々、組織になっていると言えるでしょう。

その分、情報の流通量は倍々ゲームのように日々増え、情報の「氾濫」どころか、上下左右360度、情報の塊の中に埋もれているような状況です。インターネット草創期の頃、情報量が今後飛躍的に増大するので、情報をしっかり取捨選択する能力を磨くことが重要、とよく言われましたが、もはや取捨選択する余裕がないぐらいの状況になっています。

これに関し、ここ数年、G7など国際社会で議論が活発に行われているのが、「偽情報」への対応です。ロシアによるウクライナ侵略直後、SNS上で広く流布された、ウクライナのゼレンスキー大統領が国民に対して投降を促したとされるディープフェイク映像は「偽情報」の典型例として大きく報じられました。「手段を選ばない悪意のある偽情報の拡散は、我々の社会が基盤を置いている自由や民主主義といった普遍的価値に対する脅威である」というのが日本政府の公式な立場ですが、(手前味噌で恐縮ながら)まさに「偽情報」という新たな、大きな脅威に直面していると言えます。特に、ネット上に出回る「偽情報」の多くは、その内容、目的もさることながら、作成や発信の主体が不明という点が重大な問題です。

主体という問題では、急速に発達しているChatGPT等の生成AIが新たな主体となりつつあります。かなりの情報が今後生成AI発／経由となり、更なる情報の増大につながるものと予想されます。この生成AIをどうコントロールするかも大きな課題です。ちなみに、小生の長男(大学4年生)に「ChatGPT等の生成AIをどう思うか?」と聞いてみたところ、「包丁みたいなもの」という答えが返ってきて、目を見開かされました。自分で考えたのか、誰かから聞いたのかは定かでないのですが、少なくとも、受け手にとって有意義な情報(考え)がシェアされたということかと思います。

少し話が拡散しましたが、以上のような状況においては、どの主体が、どのような情報を、どういう目的をもって、どれくらいの量、タイミングで、どのような対象に対してシェアするか、ということがこれまでも増して重要なことになり得ます。この点、浩志会メンバーの皆さんこそ、広く人々、社会に対して、最も適切な形で、多くの有益な情報をシェアすることができる主体であり、今こそ大いに有益な情報=知見、経験をシェアすべきだと考えています。今回の活動方針を「どんどんシェアしよう、皆さんの知見、経験を」とした背景には、こうした問題意識もあります。

3 活動の実践

前述のとおり、知見、経験をシェアするに浩志会活動はうってつけの場です。本会員メンバー各位におかれましては、その具体的な実践に向け、特に以下の点を意識しながら、活動を積極的に行っていただければ幸いです。

(1) 本会員グループ活動の月幹事をしっかり務める。

グループ幹事が年度開始時にグループメンバー全員を各月の幹事を複数名割り振ります。是非早め早めに月幹事内で御相談、御調整いただき、多くの方々が参加したいと思えるような魅力的な活動を企画、実施してください。勿論、月幹事以外の各月のグループ活動にも積極的に参加して、多くの「シェア」を受けていただきたいところですが、少なくとも月幹事だけはしっかりと務めていただくよう御願います。

(2) オンラインを活用し、地方・海外在住の会員もできる限り巻き込む。

グループ活動等では、講演、施設視察など引き続き会員各位がお持ちの「ネタ」をいかに多く出していただきつつ、併せて、可能な限りオンラインを活用し、地方、海外と繋げることも積極的に検討していただければと思います。地方及び海外在住の会員の方々の「浩志会アイデンティティ」意識の維持、向上を図れるとともに、そうした方々から現場の生の声をお伝えいただくことが有意義かつ貴重な「シェア」にもなります。

(3) 浩志会全体横断的活動にどんどん参加する。

本会員が中心となって実施を担う創立記念パーティ(11月)、夏季全体研修会(8月)、グループ活動合同月例会(5月前後)、サロン(随時開催)、世代間交流会(夏季)など全体横断的な活動が今年度も数多く予定されています。また、研究会員主体の月例会、OB・OG会員主体の浩志談論会など、多種多様な浩志会全体横断的な活動も、コロナ禍以前の状態と同様に頻繁に行われます。これらの活動に、浩志会の中でボリュームゾーンである本会員各位がどんどん参加し、「シェア」をし合うことで、浩志会活動の活性化、そして、会員各位の不断のブラッシュアップに繋がります。久しぶりの仲間と再会する機会にもなりますので、是非、積極的な参加を御願います。

今年度は、副代表に国土交通省の大井裕子さん、パナソニックの辻野裕子さんという盤石の布陣の下、総勢40名の幹事団をもって、本会員活動を支えて参ります。1年間、どうぞよろしく御願い申し上げます。

(1999年外務省入省、2017年入会、アジア大洋州局中国・モンゴル第二課長)